

第 27 回 世界牛病学会の概要

中尾敏彦[†]（日本産業動物獣医学会会長・前世界牛病学会理事）



2年に一度の世界牛病学会が、6月3日から8日までの6日間、ポルトガルの首都リスボンで開催された。参加者は、前回2010年のチリでの学会よりもかなり多く、66カ国から約2,200名であった。国別には、地元ポルトガルが214名と最も多く、次いで、ドイツ（205名）、ブラジル（197名）、スペイン（159名）などが多かった。アジアからは、日本の32名が最多で、イランからも28名が参加した。その他、韓国から12名、インドから8名、中国から6名、ベトナムとタイから1名ずつの参加があった。

学会の学術プログラムは、牛獣医学のあらゆる分野を網羅しており、5会場の同時進行で、32の基調講演、289の一般講演、4つのラウンドテーブル、3つのスポンサー企業主催シンポジウムが行われた。5会場のうち3会場では、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語の4つの公用語に主催国ポルトガル語を加えた5カ国語の同時通訳があった。本学会では、発表はすべて英語であるが、英語から他の3つの公用語への同時通訳を少なくとも3会場で用意することが義務付けられている。これは、学会に臨床獣医師の参加が多く、英語だけでは十分に内容を理解できない参加者への配慮から来ている。ポスター会場は、関係企業の展示場の中二階のスペースで、休憩時間にあたるミルクブレイクで展示会場に来た参加者がポスターを見に行きやすいように工夫されていた（図1）。一般発表の申し込み数は1,235題で、このうち1,083題が、口頭発表（289題）またはポスター発表（794題）として受理された。日本からは、口頭発表が3題、ポスター発表が12題であった。今回の学会では、特に、学術プログラムの充実に重点が置かれ、基調講演、一般講演、シンポジウムとも優れた内容のものが多かった。特に、ラウンドテーブルは、4～5名の専門家の話題提供の中で提起された課題について、参加者も意思表示しながら議論を進めるもので、1日目は乳牛の繁殖管理、2日目はビジネスとしての獣医臨床、3日目は近未来の獣医師に生産者が求めるものと獣医師の対応、



図1 企業等の展示会場。中二階がポスター会場



図2 学会メイン会場。5カ国語同時通訳付き

4日目は乳牛の健康、繁殖及び生産性の向上に必須な条件としてのバランス良い栄養管理がテーマであった。いずれも人気が高く、多くの参加者を集めたが、最も盛り上がったのは、1日目の繁殖と4日目の栄養管理であった。臨床獣医師が直面している課題はどこも同じようだ。

会場のリスボンコンgresセンターは、市の中心から離れており、交通の便は良くなかったが、会議場としての構造が良く、プログラムを片手に、お目当ての講演を聴き逃すまいと、せっせと会場間を移動する意欲的な参加者が目立った。したがって、セッションや講演のテーマによって、人が溢れる会場もあれば、比較的静かな会場もあった。メイン会場は、1,500人程度収容できると

[†] 連絡責任者：中尾敏彦

〒067-0003 江別市緑町東3-111-31 ☎・FAX 011-398-6705 E-mail: rakunonakao@kyp.biglobe.ne.jp

思われたが、後部の座席まで埋まることが少なくなかった(図2)。

学会1日目に理事会が開かれ、世界牛病学会の運営等に関する協議が行われたので、主な事項について紹介する。

(1) 過去4年間の事業報告

ア 加盟国の少ないアジア、アフリカ地域の国々の加盟推進

インド、中国などが新たに加盟した。

イ 学会開催立候補のガイドラインを新たに作成した。

ウ ニュースレターを年3、4回発行した。

主な記事は、次回世界牛病学会開催案内、北米、ヨーロッパ、ラテンアメリカなどの地域における牛病学会の開催案内、各国で開催の牛病学会情報など。今年度から、世界各国の牛の原産種の紹介を開始。アイルランド、日本、イランの原産種の紹介記事を受理。

(2) 第27回世界牛病学会大会(WBC 2012)報告

組織委員長から参加登録者数、発表演題数、スポンサー企業からの支援状況、学術プログラムの評価などについて報告。

(3) WBC 2014(ケアンズ、オーストラリア)準備状況報告

開催期日は7月27日～8月1日。オーストラリア国内7つの獣医系大学とニュージーランドの獣医系大学の協力を得て、学術プログラムの検討を開始。

(4) WBC 2016 開催国の決定

今回は、メキシコ、アイルランド、スペインの3カ国から立候補があり、2012年4月に各国から詳細な応募書類が提出され、事前に理事全員に郵送されていた。また、学会の初日に、昼休みを利用して、各国のプレゼンテーション(10分程度ずつ)が行われた。理事会では、それぞれの国の代表者と担当者を2名ずつ呼んで、予算、地域あるいは国内での牛病学会の開催実績、予定参加者数、会場などについて質疑応答を行った。そして、

協議の後、投票を行った結果、アイルランドを開催国とする(2016年7月3日～7日)ことが決まった。WBCは、慣例として、ヨーロッパとそれ以外の地域で交互に開催することになっている。このところ、WBC開催に立候補する国が少なく、複数以上の立候補があったのは、2000年に、2004年の開催国としてカナダと日本が立候補して以来、12年ぶりのことであった。

(5) 理事及び役員の改選

現理事のうち、ウルグアイ、ブラジル、日本(中尾敏彦)の3人の理事が今期で退任の意向を表明し、承認された。次いで、新しい理事候補者として、日本(田島誉士、酪農学園大学教授)、ブラジル、ウルグアイ、フランスから4名の推薦があり、協議の結果、4名を理事に選任した。また、アフリカ代表の理事は、これまでのエジプト代表からモロッコ代表に交替させることに決まった。

会長、副会長(2名)1名、事務局長は再選された。もう一人の副会長(慣例としラテンアメリカから選出)には、チリからの理事が選任された。

最後に、今期で退任する理事を代表して、中尾から挨拶が述べられた。

さて、次回2014年のWBCはオーストラリアのケアンズで開催される。オーストラリアの組織委員の一人から、WBC 2014はアジアに近いオーストラリアなので、4つの公用語の他に、アジアの国の言語を一つ同時通訳に加えたいのだがという相談を受けた。日本から何人くらい参加すれば日本語の同時通訳を付けることが可能なかを示してもらった方が話が早いのだと答えておいた。

私事ながら、2000年に、それまで長らく理事を務められた浜名克巳先生から理事の職を引き継いでから、これまで12年間にわたり、アジア代表の理事として世界牛病学会の運営にかかわってきた。この間、ご指導、ご鞭撻をいただいた関係各位に深甚なる謝意を表したい。WBCの日本招致、アジア牛病学会の設立といった重要課題を残したままではあるが、これらについては、新しく理事に就任された田島誉士先生の手腕に期待したい。